

朱子学ネットワークにおける内村友輔

森 川 潤

(受付 2021年5月25日)

はじめに

内村、昌平_ニ在ル時ハ與輔ト稱ス。雲州松江醸戸。儒學ヲ以テ家ヲ興サン欲トシ、浪華_ニ游學、篠崎小竹_ニ師事。小竹歿後、東游、聖堂_ニ入ル。經學ヲ攻メ、細行ヲ慎ミ、尋常一流ノ老書生ナル_ニ、大坂_ニテハ、後藤俊藏已_ニ病耄、廣瀬旭莊ハ游歴、其生徒ヲ集メ門戸ヲ支フル者ハ、藤澤東咳、次_ニ内村アル位ノ事也。＜中略＞京攝儒流多クハ無行、唯内村ハ獨身ニテ、行檢^(後カ)孳々、徒弟ヲ教授、此、尚_ニブベシト爲ス¹⁾

昌平坂学問所書生寮において内村友輔と同窓であった岡鹿門は、退寮したのち、山陽路や山陰路を遊歴し、文久元（1861）年11月、松本奎堂、松林飯山とともに大坂に双松岡^{そうしようこうがくしや}学舎をひらく²⁾。以下、大坂滞在中の仙台藩士岡鹿門の回想である。内村友輔は、松江城下の酒造業をいとなむ家に生まれる。儒学により生計をたてたいと考え、大坂に遊学し、篠崎小竹に師事する。小竹の没後、江戸の昌平坂学問所に入寮し、もっぱら経学をまなび、些細な事柄にも身をつつしむ。小竹が他界した大坂では、小竹の女婿後藤松陰は病耄し、広瀬旭莊は諸国を遊歴し、塾を閉じている。門生を受け入れ、市井の儒者として生計をたてているのは、藤沢東咳、友輔くらいしかいない。大坂では、小竹の養父三島の時代に徂徠学がさかんになり、徂徠学無頼派の土壤ができる。かれらは、聖人の道を記した儒家古典を精読し、聖人の道を明らかにすることを目的とする経学ではなく、言語を媒体として自己の思想や感情を表現し、人間の感情や情緒に訴える詩文に没頭する。友輔はひたすら道徳的修養をつみ、塾生の教授にあたる貴重な存在である。友輔は、朱子学を講じ、数年後には市井の儒者として生計をたてることができるようになる。そのころ、友輔は松江藩から仕官するよう命じられ、元治元（1864）年9月、帰松する

本稿では、三都から遠くはなれた山陰の松江城下の町人の子である内村友輔が、松江藩の儒員に登庸される経緯をたどり、その背景について考察する。そのために、友輔が上坂し、小竹塾に入門した事由、さらに幕府直轄の昌平坂学問所書生寮に入寮した経緯、書生寮において修学・経験した事柄、大坂における市井の儒者としての足跡についてあきらかにしなければならない。松江藩があらたに儒者を登庸しなければならない事由についてもさぐらなければならない。

I. 篠崎小竹塾

内村友輔は、文政4（1821）年4月、松江城下中原土手町の油屋をいとなむ本郷屋儀八の第4子に生まれる。通称は友輔、はじめ音之助、のち与三郎、名は篤斐、鱸香は号である。幼少期から、家業を手伝いながら、親の目を盗み、読書にふける。『実語教』、『庭訓往来』などの往来物を独習し、油の行商のあいまに百姓町の「正覺寺の典覧という老僧」や「生田十兵衛といふ學者」に素読をさずけられる³⁾。生田十兵衛は、文化7（1810）年、40歳のときに俸禄100石の家督をつぎ、外中原町の私塾相善舎で和学と儒学を講じる⁴⁾。学問とはほど遠い家業であるが、友輔は、寺僧や塾師に才能を見いだされ、学問によって、すなわち儒者として生計をたてるという着想を得たであろう。友輔は、太宰春台の『和読要領』を手にいれ、独学にはげむ。『倭読要領』は、享保13（1728）年に板行された「語学書」であり、「和文風の訓読による煩雑さと誤りを排し、簡潔正確な訓読の方向を模索したもので、近代初頭の漢文訓読文体に多大の影響を及ぼした」（日本国語大辞典）ものである。友輔は、父が造り酒屋に商売をかえたために酒の配達にかけまわり、間隙をぬうように経書をひもとく。

内村友輔は、父の没後、弘化元（1844）年に京都にのぼり、松江藩定府庄司郡平の紹介により貫名海屋の門にはいる⁶⁾。郡平は、蛮社の獄のさい、「蛮学」に「従事」する「御家門ノ藩士」の「望月兎毛（雲州ノ留守居）庄司郡平（同藩ノ士）」として名をあげられる⁷⁾。友輔を仲介した庄司郡平は天保15（1844）年に亡くなるが、その子郡平は友輔がのちに大坂に塾をひらいたときに入門し、のちに蘭学をこころざす⁸⁾。書家として知られる海屋は、安永7（1778）年に阿波徳島城下に生まれ、書画の修業のために、長崎から江戸にいたる諸国を遊歴する⁹⁾。その間、大坂の懐徳堂で中井竹山に師事し、儒学をまなびながら、大坂の文人とまじわる。海屋は、文化8（1811）年ころ京都で須静塾をひらき、儒学を講じる。

友輔は、一時帰国したのち、大坂にむかい、弘化3（1846）年9月に土佐堀白子裏町の松江藩蔵屋敷のちかくの篠崎小竹の塾に入門する。友輔は20代半ば、小竹は60代半ばである。小竹は、京摂において頼山陽と併称される文人として知られるが、若いころ、江戸にくんだり、昌平坂学問所において、尾藤二洲、古賀精里に師事し、寛政正学派の朱子学の学統をうけた儒者である。小竹塾は大坂における「経学を主とした本格的な儒学研究の場」のひとつである¹⁰⁾。

小竹は、大坂で生まれ、少年期に徂徠学の洗礼をうける

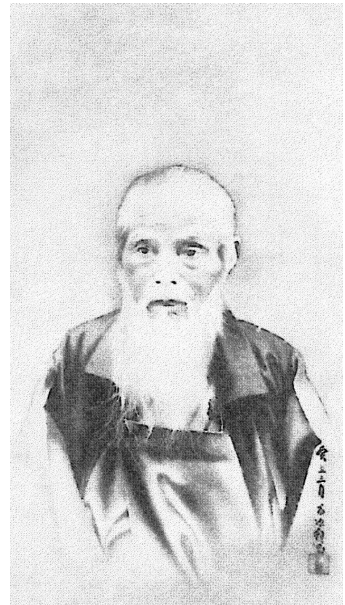


図1 内村友輔⁵⁾

が、のちに徂徠学に反撥をおぼえ、朱子学に転向する。それは、第1に、小竹が、荻生徂徠の学説については、反道徳性と「新奇ノ説」に隔絶感をいだき、その学説が誘発する「叢園ノ学士」の人間性に不快感をおぼえるからである。第2に、小竹は、養父が収集した蔵書をひもとき、折衷派、考証派などの諸学派の言説や学説に接することはあったが、共鳴することはなかった。これらの諸学派が異学とみなされたのは、「新規ノ説」をとなえるだけでなく、「義理」をなおざりに、「風俗」をそこなうからである¹¹⁾。小竹は、朱子学に関心をいただくようになる。

第3に、小竹が朱子学にたどりつくのに、ふたつの誘因があった。ひとつは、頼山陽とのあいである。山陽は、寛政10(1798)年4月、江戸遊学から帰広する途次、篠崎家に立ち寄る。山陽は、前年、江戸におもむき、広島藩上屋敷に起居し、昌平坂学問所の敷地内にある学問所儒者の尾藤二洲の役宅にかよう。「洛閩之書」、すなわち北宋中期(11世紀中ごろ)の程顥、程頤などの学説、その学説を集大成した朱熹の学説に関する書にひかれ、朱子学に傾斜しはじめた小竹は、正学派朱子学の牙城でまなんだ山陽に羨望の念をいだく。小竹は、のちに京都で開塾した山陽と兪頤のまじわりをもつ。もうひとつは、小竹が1歳年長の山陽に刺激をうけ、2度、江戸に遊学し、尾藤二洲と古賀精里に師事したことである。養父の時代、「軽薄の風俗」の地¹²⁾大坂において、「朱子学攻究のグループ」が形成される¹³⁾。その中心には、安芸竹原の頼春水、伊予川之江の尾藤二洲がいたが、のちに肥前佐賀の古賀精里がくわわる。かれらは寛政正学派と呼ばれ、正学を首唱する。正学は、まず、「孔孟之所説」のなかでも「程朱之所伝」、すなわち宋代の儒学者、程顥と程頤の二兄弟と朱熹がつたえる学説でなければならない。その学説に混じり込んだ異質な要素を排除しなければならない。つぎに、正学は「学問」であると同時に、「倫理」でなければならない。個人的な道徳実践にとどまらず、社会的な倫理的な価値の実践におよぶのが、正学である。幕府は、異学が流行し、風紀がみだれるなかで、封建的身分制を再編・強化するために、寛政期の昌平饗改革の過程において正学派朱子学をとりこむ。春水、二洲は庶人の出であるが、春水は広島藩儒者に登用される。寛政2(1790)年に異学の禁論達されたのち、二洲と精里は、幕府の昌平坂学問所の儒者に招聘され、学問所の改革にあたる。

小竹が昌平坂学問所の儒者のもとでまなぶことができたのは、養父三島が、ふたりの属する大坂の混沌社の社友であったからである。小竹が江戸に遊学したさいにまなんだのは、「朱子学攻究のグループ」の朱子学にほかならない。正学派朱子学を奉じる小竹の門人帳には、総数1488名の入門者名がしるされるが、その地理的出自は大坂はもとより、近畿以西はすべて、東は奥州から信州にかけての諸国、越前・越中・越後、美濃、三河におよぶ。

友輔は、斎藤町の出雲荷受問屋の出雲屋儀右衛門の家に寄寓する。門人帳には、つぎのようにしるされる¹⁴⁾。

伊藤顕蔵 雲州神門郡塩谷村人 父曰俊蔵

高寫介 九月四日

内村音之助 同松江人 本郷屋茂八弟

友輔は、出雲塩谷村の伊藤顕蔵とおなじ9月4日に束脩をおさめる。顕蔵は、文政12(1829)年に出雲高松村に生まれる。天保13(1842)年、塩谷村の伊藤宜堂塾に入門し、宜堂の養子にむかえられる。伊藤宜堂は、文化10(1813)年ころ江戸にのぼり、朝川善庵のもとで折衷学をまなぶ。のちに出雲塩谷村で開塾する。顕蔵は、出雲を遊歴する貫名海屋にであい、京都にのぼり、海屋の須静塾に入門する。顕蔵は、友輔と同門になる¹⁵⁾。顕蔵は、のちに内大臣近衛忠熙が領地の摂津伊丹にひらいた郷学明倫堂の教頭にあげられる。初任教頭には、小竹門下の橋本香坡がむかえられる。顕蔵は「高寫」の紹介により小竹塾に入門するが、友輔には紹介者の名がしるされない。小竹塾に最初に入門した出雲出身者は、山名春輪である。文政6(1823)年12月のことである。春輪は松江藩支藩の広瀬藩の「医生」である。その後、松江藩士の妹尾謙三郎が天保9(1838)年12月に小竹塾に入門する。

日向飢肥藩の安井息軒も、儒学をまなぶために上坂し、文政2(1819)年に小竹塾に入門する。息軒は、「本國にありては舊籍に乏敷故上坂せし事なれば別に師家を取る念もなかりしか當時藏書家と聞へたる篠崎小竹は其の門に入らねは書物を貸さぬ由に付同氏の門に贄を取り書籍を借覧せり」という¹⁷⁾。しかし、儒書を借覧し、「殆ど独学といってよい」日々をおくっていた¹⁸⁾とは考えられない。儒書を繙読しようとするれば、儒書を所蔵する儒者に入門しなければならない。儒者のもとに参集する儒生は、「師教よりは朋友の切磋



図2 中之島界隈¹⁶⁾

にて知見を博め學問は進候事」¹⁹⁾と考へ、会読を重視したはずである。息軒が、小竹塾に入門したのは、蔵書家としても知られる小竹の梅花社から書籍を借覧するためだけではない。飴肥藩の人びとが蔵屋敷がある大坂に遊学すれば、土佐堀田辺屋橋近くの飴肥藩蔵屋敷の長屋に起居し、梅花社でまなぶという慣行が根づいていたからである。

友輔は、あるとき、小竹に「卿は庶民の子なり而も士大夫の學をなす志す所如何」と問われる²⁰⁾。町人の子が経書をまなぶ理由を問われ、友輔は「願くば恩師の教により讀書の力を得ば之に因りて帷を坊間に垂れ些か庶民子弟の教育に當らんのみ」とこたえる。師のもとでまなび、みづから経書を読解する能力をたかめ、庶民子弟の教育にあたりたい、というのが友輔の願望である。小竹は、「早々昌平黌入學の得策なる」と江戸行をすすめる。友輔は、すでに30歳である。市井において儒者として生計をたてるためには、修業をおえなければならぬ。小竹は、友輔の修業の仕上げの場として昌平坂学問所が適当であると考えたであろう。

小竹塾でまなび、昌平坂学問所や林家の学塾にすすんだのは、友輔だけでなく、つぎの人びともいた。

安井仲平（息軒）	文政2（1819）年	日向飴肥
江木健哉（鰐水）	天保3（1832）年	備後福山
妹尾謙三郎	天保9（1838）年	出雲松江
頼三木三郎（三樹三郎）	天保11（1840）年	京都
高鋭一郎（鋭一）	天保15（1844）年	阿波徳島

小竹は、嘉永元（1848）年3月以降、門生をうけいれなくなるが、翌嘉永2（1849）年冬に「腸胃の病」を再発する²¹⁾。小竹は衰弱し、小竹塾の門生は去り、「益友も甚乏敷」なる。友輔は、嘉永2（1849）年に松江にかえる。それは、江戸に遊学したいという「數年來の志」²²⁾を兄の義八郎や親友の山口叔多（巻石）に直接つたえるためである。友輔は、遊学資金を援助するよう懇願するが、同意を得られないまま、翌年、ふたたび大坂にもどる。友輔は、病床の小竹から「昌平黌教官安積良齋への紹介状」を手渡され²³⁾、江戸にむかう。小竹は、嘉永4（1851）年の夏には「腹痛頻々」という容態になり、5月には没する。享年71歳である。

II. 昌平坂学問所

1) 書生寮の日常

内村友輔は、江戸にたどりつくと、兄茂八につぎのようにつたえる²⁴⁾。

僕四月七日午前中に到着いたし候處、靜次郎君も軍用方被仰付候處、いまだつとめ方もしつかり相知れ不申候へども、いづれ海防方と相察し候、それゆへ私も早速出かけ、良齋翁の方昨日入門相濟候而、直様聖堂の方へ相頼、良齋翁より林大學頭様並に一齋翁古賀

へ、私門人内村生此度聖堂入寮致度よし申出被下、早速相濟候而入寮いたし候

友輔は、嘉永 4（1851）年 4 月 7 日午前中に「到着」し、はじめての江戸でたずねたのは旧知の静次郎である。静次郎は、松江藩の家臣団に属し、「軍用方」として松江藩の江戸屋敷に在勤していたとおもわれる。友輔は、おそらく大崎下屋敷の長屋の静次郎の部屋に数日滞在し、4 月 14 日に神田の居宅で家塾をいとなむ安積良斎をたずねる。小竹からわたされた紹介状を手渡し、良斎塾への入門をゆるされる。良斎の門人帳には、つぎのようにしるされる²⁵⁾。

雲州處士

四月十三日

内村音^{与三郎}之助

書生寮

入門日は嘉永 4（1851）年「四月十三日」、身分は「雲州處士」である。處士は仕官しない民間人である。「書生寮」は、友輔が書生寮に入寮したのちに加筆されたものである。

紹介者の篠崎小竹と良斎は面識はないが、ふたりは詩文ともに定評があり、同時代の代表的な文人や儒者と親交があった。津藩儒者齋藤拙堂のような共通の友人もすくなくない。大坂は、西に西国街道がのび、東に山陽道、東海道がつながる陸路の要衝にある。海路も諸国につながる。梁川星巖のように、日本各地を遊歴放浪する文人は少なくなかった。大坂に居宅をかまえる小竹を訪う文人墨客はたえることはなかった。小竹も、詩心を涵養するために各地を遊歴したことがある。

良斎は、寛政 3（1791）年に陸奥二本松藩郡山の神主の家に生まれる。17歳のときに江戸に出奔し、佐藤一斎の学僕になる。文化 7（1810）年には、八代洲河岸の林家邸宅の敷地にもうけられた家塾に入門し、大学頭の林述斎と林家塾の塾長の佐藤一斎に師事する。文化 11（1814）年には、神田駿河台に塾をひらき、天保 14（1843）年に陸奥二本松藩校敬学館の教授に登用される。嘉永 3（1850）年 3 月、60歳のときに幕府儒者に任じられ、江戸にもどり、昌平坂学問所の儒者になるが、安政大地震で焼けだされ、敷地内の役宅にうつるまで神田の居宅から学問所にかよっていた。良斎は、昌平坂学問所において、大学頭林健（壮軒）、儒者の佐藤一斎、古賀謹一郎に「私門人内村生」の「聖堂入寮致度よし」をつたえる。書生寮の定員は「四十四人」であるが、現員は「三十八九人」であったために、友輔はただちに入寮をゆるされる。

林家塾の昌平黌は、寛政 9（1797）年 12 月に幕府直轄になり、幕臣のための教育機関として再編され、昌平坂学問所に改称する。享和年間（1801～1804）に学問所敷地内に書生寮が付設され、ふたたび諸藩士、浪人、庶人をうけいれる。以後、大学頭、学問所儒者の門人であれば、書生寮への入寮をゆるされる²⁶⁾。書生寮に入できるのは、「郷里で拔擢せられ出て来る人」、「もうかなりできている人」²⁷⁾である。藩校で選抜され、派遣されたものだけでなく、庶人の出である内村友輔も学問所儒者良斎の「弟子」として昌平坂学問所書生寮に入寮する

ことできる。

「書生寮姓名簿」には、友輔について、つぎのようにしるされる²⁸⁾。

雲州松江処士

安積

嘉永四入

内村与助

安政二退

亥卅一

「嘉永四入」とは嘉永4（1851）年入寮，「安政二退」とは安政2（1855）年に退寮したことを意味する。「亥卅一」は入門時の年齢をさす。「町人の身を以て天下の昌平黌に入寮した者は、唯だ先生一人」であった²⁹⁾ わけではない。「松江藩士」として入寮した³⁰⁾ わけでもない。友輔は、安積良斎の紹介によって入寮した「処士」である。

友輔は、4年あまり在寮するが、「貧苦の状一々申上れば二本や三本の巻紙にてはとても書盡し候事出来不申³¹⁾」という窮状であった。「在寮四十四人の諸士」は「みな其君侯」から「五口俸三口俸或三十兩廿兩」を「修業料」として下付される³²⁾。10年ほどまえに林家塾の塾長である河田迪斎の私塾に入門した松江藩士妹尾謙三郎は、藩邸に起居し、「月々金二歩」の「修業料」を給付される。友輔は、遠縁の山口叔多と兄の茂八から送られる、わずかな金員も借金の返済にあてざるを得ない。「送り來りの金も少々にて、たしまへは典物許、然處それも直に種盡き³³⁾」という極貧の生活をしいられる。「節季の拂など大不足にて春二月までの處色々ことはりいたし置候へども、此二月はとても六ヶ敷二付、禪と袷一枚を残しあとは残らず手のまはりのもの迄」質種にしなければならない。いつでも「寫本」の内職があるわけではない。書生寮では、ふたりの炊夫が賄いにあたるが、「米塩薪炭等の諸費」も負担になる。友輔は、「早々退き度と俸存候へども」、「質物と飯代をすまさず候ては退寮難出来³⁴⁾」という抜き差しならない情況におちいる。退寮するには、質種をはらいもどし、借財を返済しなければならない。友輔は、貧苦のために「誠に平生氣饑へ候而、文を書ても軟弱になり詩を作れば俗になり³⁵⁾」ながら、苦難を耐え忍ぶ。

友輔が入寮したころ、大学頭は壮軒（健）であったが、嘉永6（1853）年9月に病没したために、復斎があとをつぐ。「御儒者」、すなわち学問所儒者は、佐藤一斎、安積良斎という「二大碩學³⁶⁾」であった。「御儒者」は、「一代に二名」が「定員」であり、幕府は「碩學名望の者」をえらぶ。

一斎は、「公朱私王」と評され、昌平坂学問所儒者としては朱子学を講じ、私人としては陽明学を奉じる³⁷⁾。一斎は、青年期より「学派を相対化する公正な視座」をもち³⁸⁾、朱子学と陽明学は対立するのではなく、それらを折衷することによって孔孟の精神をうかがうことができると考えていた。一斎は、「自警吟³⁹⁾」において、「須知三戒在終身」、すなわち、ひとは生涯にわたり欲望を抑制しなければならないと吟じ、日常的に道徳的修養が必要であると説

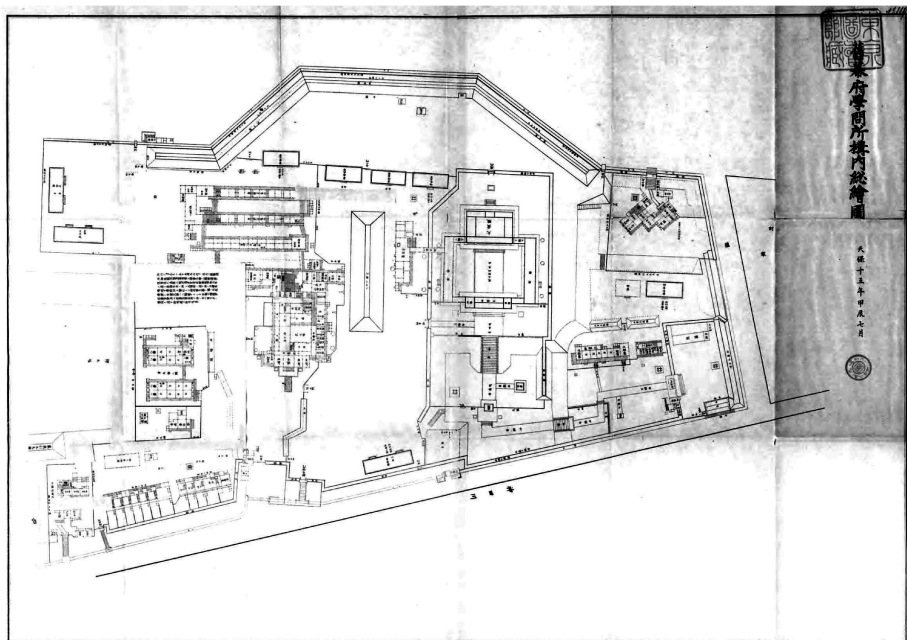


図 3 旧幕府学問所構内総繪圖⁴⁴⁾

く。「三戒」は、『論語』の「君子有三戒」に拠る⁴⁰⁾。朱子学にしても、陽明学にしても、学風は「大抵性理ニ基キ」「躬行ヲ主トセリ」⁴¹⁾。

艮齋は、朱子学を信奉していたが、朱子学を権威化したり、絶対化したりはしない。艮齋は、「道ハ天下ノ公道ナリ學ハ天下ノ公學ナリ」、「學ハ一家ヲ墨守スルニ及ハス道ノ存スルハ皆學ト思フヘシ」⁴²⁾と述べる。かたくなに朱子学だけを信奉するのではなく、陽明学であれ、清朝考証学であれ、「道」があれば、みな学ばなければならぬ。それは、「孔子自_レ有_レ孔子之時_レ。孟子自有_レ孟子之時_レ。而程朱自有_レ程朱之時_レ。時異故教異」⁴³⁾からである。孔孟にしても、程朱にしても、時代の産物であり、時代が推移すれば、その時代のなかで、その教えを解釈しなければならない。

寛政期に林家塾が改革され、幕府の直轄の教育機関として昌平坂学問所に改称されたのち、正学派朱子学が採用されるが、一齋や艮齋の時代は、諸学派の生成により、もはや原理主義的な道学主義に固執し、朱子学一尊という狭量な世界にとじこもる時代ではなかった。

昌平坂学問所書生寮には、各地の俊才がつどい、藩や身分の垣根を越えて交遊する。友輔が在寮した前後には、つぎのような人びとが書生寮に入寮する。

弘化 4 (1847) 年	南摩三郎	会津藩士	古賀門
嘉永元 (1848) 年	重野厚之丞	薩摩藩士	古賀門
嘉永 2 (1849) 年	松本謙三郎	刈谷藩士	安積門

嘉永 5 (1852) 年	岡啓輔	仙台藩士	安積門
嘉永 6 (1853) 年	原任蔵	水戸藩士	古賀門
嘉永 7 (1854) 年	清川八郎	鶴岡藩士	安積門
安政 3 (1856) 年	松林駒次郎	大村藩士	安積門

南摩三郎は名は綱紀，通称は八之丞，号は羽峯。重野厚之丞は名は安釋，字は士徳，号は成斎。松本謙三郎は通称謙三郎，名は孟成，衡，号は奎堂（以下，奎堂）。岡啓輔は名は千仞，初名は敬助，号は鹿門（以下，鹿門）。原任蔵は名は忠敬のち忠成，元服したのち任蔵，のち市之進。清川八郎は，幼名元司のち正明，号は楽水，蕝堯，士興，変名を大谷雄蔵，日下部達三という。松林駒次郎は，名は漸，号は飯山，字は伯鴻，通称は漸之進，廉之助（以下，飯山）。友輔の墓誌銘を起草したのは，書生寮の盟友重野厚之丞，安釋である。友輔は，幕臣の家生まれ，嘉永元（1848）年に寄宿寮にはいった中村敬宇とは，終生，音信があった。友輔は，寮友とともに日常生活をおくる。友輔の寮友のひとりとは回顧する⁴⁵⁾。

諸藩學校_ニ於テ有望ノ書生ヲ遊學サセ、且其人、藩_ニ在テ學問已_ニ成ル以上ハ、別_ニ指導ヲ仰ガズ、朋友切磋、其材_ニ仍リテ其器ヲ爲ス。月_ニ兩度、構内兩儒ノ經書會_ニ列聞スルノミ_ニテ、諸儒ノ家塾ト大イ_ニ其風ヲ異_ニス。

諸藩は，藩校において「有望ノ書生」を遊学生として昌平坂学問所におくりだす。かれらは「学問已_ニ成ル」ものであり，「指導」を必要とはしない。寮友仲間_ニ切磋琢磨し，みずから器をみがくだけである。友輔のような庶人のばあいには，市井の儒者のもとで研鑽し，「学問已_ニ成ル」ことがみとめられたものだけが昌平坂学問所にはいることができる。寮生は，月に2回，ふたりの儒官の「經書會」に参加するだけである。

他の同窓の伝記によれば，例会は月に1回しかひらかれない⁴⁶⁾。

毎月一回この二先生の臨席があつて，寮生一同は講堂に参列する。その時舎長が旁らに在つて，検閲の印を捺す。それが済むと鬮に依つて人を極めて，當つた者が經書二三章を講ずる。それに対して寮生が互に意見を述べ，議論を上下して，儒官の批判を仰ぐ。

昌平坂学問所では，旗本・御家人の寄宿稽古人と通稽古人，全国各地から参集した書生寮生がまなぶ。旗本・御家人の子弟は，学問吟味の受験のために，儒者の經書講釈を聴講したり，經書の輪講，史書の会読に参加する。書生寮は，もともと「自修」を主とし，寮生同志が輪読や会読をおこない，実力を養う場である。寮生は，学問所の学問吟味の受験資格はないが，稽古人と同様に儒者から試業をうける。そのひとつが策問と呼ばれ，儒者から提示される漢文題に漢文で回答するというものである⁴⁷⁾。書生寮生は，寄宿寮の寮生とは，春秋2回の詩会のさいに，講堂で同座する機会があつた。書生寮では，いわゆる自治制がしかれ，舎長が寮中の事務を担当する。才学に秀で，人望のある寮生が舎長につき，5人扶持が給与される。助勤2名が舎長を補佐し，3人扶持が支給される。そのほかに，詩文掛，經義掛と

いう役係があった。詩文掛は、寮生の詩文を添削する役割である。天賦の才にめぐまれた寮生だけの役どころである。

2) 攘夷論

友輔が入寮し、2年あまりたった嘉永6（1853）年6月、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリー（Matthew Calbraith Perry）がひきいる艦船が浦賀に来港し、浦賀奉行にアメリカ大統領フィルモア（Millard Fillmore）の国書を手交する。翌安政元（1854）年1月には、東インド艦隊が再来し、3月には砲艦外交に屈した幕府とのあいだで日米和親条約を締結する。大学頭林復斎も、応接掛として交渉にあたる。

書生寮では、「攘夷論」がわきおこる⁴⁸⁾。

外警ノ起ル以来、在寮書生ハ攘夷論_熱狂シ、名家大家、或ハ要路_出入スル人々ヲ訪ヒ、東湖ハ勿論、羽倉、佐久間、天山、宕陰、息軒諸名家ヲ訪ヒ、其著論文書ノ風説ヲ探索スル_従事ス。

書生寮生は、藩命により藤田東湖、羽倉簡堂、佐久間象山、藤森弘庵、塩谷宕陰、安井息軒などの識者をたずねたり、かれらの著論、文書を収集したりする。外出は毎月10回に制限されていたが、「武藝大流行」になり、千葉道場や斎藤弥九郎道場にかようものもいる。「箕作」、すなわち箕作阮甫宅にかよい、「蘭文典」⁴⁹⁾をまなぶものもあらわれる。

水戸藩士の藤田東湖は、嘉永6（1853）年、謹慎処分をうけていた藩主徳川斉昭が幕政に復帰すると、海岸防禦御用掛として江戸藩邸の定詰を命じられる。東湖が弘化3（1846）年に脱稿した『弘道館記述義』は、会沢正志斎の『新論』とともに後期水戸学の尊王攘夷論を代表する著作として全国に流布し、幕末の志士に愛読される。幕臣の羽倉簡堂は、代官として各地に勤務するが、老中水野忠邦により納戸頭に抜擢され、幕府財政の再建につとめる。隠居後、嘉永2（1849）年に『海防私策』をあらわし、外敵対策を論じる。松代藩士佐久間象山は、アヘン戦争後の国際情勢を研究し、天保13（1842）年に「海防八策」を藩主真田幸貫に上程する。嘉永4（1851）年、江戸木挽町に象山書院をひらき、勝海舟、吉田松陰、坂本龍馬、橋本左内などの門人に砲術と儒学を兼修させる。小野藩士藤森弘庵は、弘化4（1847）年、江戸下谷に塾をひらき、ペリーが来航すると、『海防備論』（嘉永6年7月起草）を幕府に奉呈する。安政の大獄に連坐し、江戸を追放される。晩年は天山と称する。

大学頭は、羅山以来、朝鮮通信使応接の中心的役割を果たしてきたが、アメリカ東インド艦隊が来航し、米和親条約を締結する過程において、林復斎も応接掛として交渉にあたる。学問所儒者も、外交・海防問題に関与する。一斎は、嘉永2（1849）年閏4月、老中、若年寄から海防問題などについて意見具申をもとめられ、「海防策」、「時務策」などの意見書を提出する。良斎は、尚歯会の渡辺華山、高野長英、小関三英と親交があり、政治・社会問題、

海防問題に関心をもっていたが、みずから「読夷匪犯境録」、「防海賛論」、「海防策」を著す。文久三博士と呼ばれる安井息軒、谷宕陰、芳野金陵も、実証的な学問方法論をとり入れた大儒として学問所儒者に登用されるが、海防などの時事問題にもするどく感応する。

寮生は、会読や詩会に専念するよりも、「時務を知る」こと、すなわち「實用經綸を主とし、博く皇漢古今の歴史を読み、世運の遷變と、治乱の困りて起る所以とを究め」ることに関心をもつようになる⁵⁰⁾。なかには「日本外史研究會」を主宰し、「史を閲し、王覇の廢興する所以」⁵¹⁾を攻究するものもいた。『日本外史』は、頼山陽が司馬遷の『史記』を手本とし、漢文体で著した武家の興亡史である。文政10(1827)年には脱稿し、松平定信に献呈されるが、天保7(1836)、8年ころ出版されるまでは、写本で流布していた。『神皇正統記』、『読史余論』、『大日本史』などの先行する歴史書が「仁政を布き民生を安んずることが、為政者に要求される主たる条件をなしていた」のにたいし、『日本外史』は「勤王」あるいは「尊王」が、「武士にとって至上の道德的義務とみなされている」⁵²⁾。『日本外史』は、幕末の志士の必読書になる。

友輔は、藩士ではないが、「熱狂」の渦にまきこまれる。書生寮生は、業をおえれば、藩儒者にむかえられるのが通例であったが、幕末期には、土佐藩士吉村寅太郎とともに、脱藩浪士を糾合し、天誅組を結成した松本奎堂、藤田東湖の甥で、のち慶喜の家臣として国事に奔走した原任蔵(市之進)⁵³⁾、尊攘の志士となる清川八郎のような経歴をたどるものもいた。友輔も、「幕府と外國の交渉顛末」に関心をもち⁵⁴⁾、内政外交に目をむけざるを得ない。

Ⅲ. 儒者

1) 大坂開塾

友輔は、嘉永4(1851)年4月から4年あまり書生寮にとどまり、安政2(1855)年7月、松江にかえる。江戸に再遊するつもりであったが、藩当局から「不許出境」を言いわたされる⁵⁵⁾。それは、「内村生以商民之子、入大府之學、是必矯稱藩士也」、友輔が町人の出であるにもかかわらず、幕府の学問所にはいり、藩士を偽った、からである。寮友によれば、友輔は「游學中公然帶刀、藩名ヲ稱ス」⁵⁶⁾。友輔は、江戸において、生活費の無心のために江戸藩邸にでむくが、藩士になりすましたり、町人の身分で内政外交に関心をもったりしたことを糾弾され、拒絶される。友輔は、松江において酒造業をいとなむ兄を手伝いながら門人をうけいていた。友輔は、1年半ののち、江戸以外の地であれば移住することをゆるされ、安政4(1857)年12月、門人の錦織令太郎とともに上坂し、西横堀斎藤町に倉山堂をひらく。仕官すれば、扶持が給与されるが、市井の儒者は塾生が納付する束脩や謝儀により生計をいたてなければならぬ。

大坂は、友輔が嘉永4(1851)年春まで滞在し、小竹塾で修学した地である。小竹はすで

に長逝していたが、その女婿後藤松陰は、大坂で塾をひらいていた。友輔は、松陰とは「小竹同門」であり、時折、松陰にまねかれ、「平生内事ナド話シ」していた⁵⁷⁾。その後、松陰は「中風」に罹り、「言語」も明瞭でなくなり、元治元（1864）年10月に亡くなる。安政5（1858）年6月、長崎においてコレラが発生し、三都にひろがるが、小竹の養子訥堂はもその犠牲者になる。友輔は、万延元（1860）年11月には「篠崎家の所藏」をすべて処分する⁵⁸⁾。徂徠学無頼派の残り香がただよう大坂では、儒者は経学より詩文に関心をよせる。友輔は、小竹の地盤をうけつぐように朱子学を講じる。

友輔が移り住んだ大坂は、動乱の舞台にかわりつつあった。安政5（1858）年6月、大老井伊直弼は勅許を得ないまま日米修好通商条約に調印し、さらに家茂の後継をめぐる將軍継嗣問題を独断で裁定する。朝廷の勅許を得ることなく条約を締結したのは、尊王の精神に反する。幕府がアメリカの要求に譲歩したのは、攘夷の精神に反する⁵⁹⁾。同年9月から翌年にかけて、直弼はみずからの専横を非難する一橋慶喜擁立派の公卿、大名、志士にたいし徹底した弾圧を断行する。

文久年間（1860～1864）以降、幕末動乱の時代と呼ばれる。幕府の権威が失墜し、朝廷の政治的な地位が浮上ただけでなく、諸藩の自立性がたかまり、雄藩が形成される。幕府、朝廷、雄藩が抗争し、幕末の動乱が亢進する。舞台の中心は、「政治都市化」した京都⁶⁰⁾である。大坂は、蔵屋敷をかまえる諸藩にとっては、京都への入り口であり、策源地でもある。友輔の近辺にも、動乱の気配がただよう。はじめは、昌平坂学問所の書生寮時代の寮友、しかも在寮中から「攘夷論」をとこなえていた尊王攘夷派の旧友である。文久元（1861）年3月下旬、友輔の居宅に仙台藩士の岡鹿門があらわれ、友輔が退寮したのち入寮した肥前大村藩士の松林飯山もくわわり、数日、滞在する⁶¹⁾。鹿門は、安政6（1859）年末、藩命により仙台にもどり、養賢堂指南役をつとめる。その後、西上し、齋藤拙堂、広瀬旭莊、藤本鉄石などをたずね、山陽路や山陰路を遊歴したのち、京都から大坂にいたる。その間、鹿門は松江の友輔の実家にもたちよる。飯山は、藩主の命により京坂に派遣され、大村藩蔵屋敷の長屋に起居し、「諸家とも交って、更に研鑽を重ねていた」⁶²⁾。三河刈谷藩の松本奎堂は、退寮後、江戸藩邸の教授兼侍読になり、安政6（1859）年には名古屋で開塾するが、大坂にうつり、文久元（1861）年11月、松林飯山、岡鹿門とともに大坂に双松岡学舎をひらく。学舎は、「大阪堂島濱通田箕橋北詰」の「大村藩邸前の濱側」の「間口二間半ばかりの小屋」であった⁶³⁾。

双松岡学舎には、公卿、萩藩や鹿児島藩の藩士だけでなく、清川八郎、本間精一郎などの尊王攘夷の志士がおとづれ、「四海の形勢を論難し、慷慨悲憤の説」をたたかわせる⁶⁴⁾。双松岡学舎は、京都所司代から尊王攘夷派のアジトとみなされ、監視下におかれる。文久2（1862）年1月、和宮降嫁により公武合体政策を推進する老中安藤信正が坂下門外で尊攘派に襲撃される。その数日後、かれらは、同志から「身辺に危険が迫っている。今夜中にでも脱

出しなくてはあぶない」という急報をうけ⁶⁵⁾、幕吏の捕縛からのがれる。

奎堂は、文久3（1863）年8月、吉村寅太郎とともに脱藩浪士を糾合し、天誅組を結成する。尊王攘夷派の公家中山忠光を擁し、大和五条に挙兵するが、8月18日の政変により形勢が一変し、奎堂は紀州藩兵の銃弾にたおれる。飯山は肥前大村にかえり、藩論が佐幕派と尊皇派に二分するなかで、少壮の家臣が結成した「三十七士同盟」⁶⁶⁾の中心人物として尊皇を鼓吹するが、慶応3（1867）年1月、佐幕派藩士に暗殺される。鹿門は、藩命により帰国し、養賢堂指南役になるが、戊辰戦争にさいし、奥羽越列藩同盟の結成に反対し、一時投獄される。のち藩主子息の侍講にあげられる。友輔は、かれらが昌平坂学問所の寮友であったために「款待せざるを得ない」立場にあった⁶⁷⁾。友輔は、しだいにかれらの思想に共感するようになり、「勤王儒者」と呼ばれる。

安政の大獄を契機として、志士や浪士と呼ばれる人びとの活動が活発になり、桜田門外の変、坂下門外の変などのテロがひきつづく。尊王攘夷派の旧友の集会所になった友輔の居宅には、やがて諸藩士もたずねくるようになる。諸藩は、京都に留守居役をおいたり、藩士を送り込んだりし、朝廷、公家、諸藩の動静を探索する。蔵屋敷がある大坂は、京都探索の足場である。江戸の昌平坂学問所で研鑽した友輔は、篠崎小竹の女婿後藤松陰が没したのち、大坂では泊園書院の東咳につぐ著名な儒者になる。ペリー来航のさい、書生寮生が要人や識者に意見をたずね歩いたように、諸藩から京撰をおとづれるものなかには、識者である友輔に面会したり、倉山堂に入門したりするものもいる。

そのなかに、萩藩の人びともいた。萩藩は、日米和親条約の締結について諮問をうけたさいにも、日米修好通商条約の調印の可否について意見をもとめられたさいにも、幕府に攘夷論をつたえ、軍事的な対決をせまる。周布政之助が主導する安政の改革では、軍制改革も重要課題になり、西洋軍制の導入がはかられる。改革の過程において、激しい政争が生じるが、同時に尊王攘夷運動をになう俊傑が発掘される。萩藩は、文久年間以降、中央政局への進出を企図する。

「長州侯の命」により「長州藩人」の佐々木彬と竹下毅が上坂し、友輔の「塾生」になる。かれらは、文久元（1861）年6月ころ、他の「塾生」とともに「來京」する⁶⁸⁾。久坂玄瑞の弟玄機は、「君の命」により「書物とゝのへ」のために京坂にのぼり、文久2（1862）年4月には友輔と「時々往来談話」する⁶⁹⁾。玄機は、弘化3（1846）年8月、3年間の医学修業のために京都にのぼる⁷⁰⁾。翌4（1847）年6月には、緒方洪庵の適塾に入門し、すでにオランダ語を習得していたのであろう。嘉永元（1848）年3月には塾頭にあげられる。玄機が京坂にのぼったのは京都情勢を探索するためであり、友輔と「往来談話」したのは友輔のもとに尊攘激派の志士が出入りしていたからである。文久2（1862）年7月初旬、萩藩は京都河原町の藩邸で会議をひらき、桂小五郎、久坂玄瑞などの松下村塾グループが主導し、「天朝へ忠

節幕府へ信義祖先へ孝道」という藩としての方針を決定する⁷¹⁾。萩藩の藩論は、公武合体から「破約攘夷」あるいは「奉勅攘夷」に急旋回する。友輔も、雄藩の政治的判断に影響をおよぼす、いわゆる識者のひとりになる

2) 松江藩儒者

友輔は、「儒者の末にありて、可也に業も出来致し」⁷²⁾、市井の儒者として生計をたてることができるようになる。塾をかまえ6、7年たったころ、友輔は松江藩から何度か大坂蔵屋敷に出頭するよう命じられる。文久3（1863）年3月には「五人扶持」で登用するという沙汰があり、翌4月には松江藩士の妹尾謙三郎が友輔のもとに来訪する⁷³⁾。元治元（1864）年9月、友輔は大坂の塾をたたみ、帰松する。

友輔が大坂蔵屋敷への出頭命令に容易に応じなかったのは、ふたつの理由がある。ひとつは、「赤貧に相甘んじ、來り候人文を教ゆるのみ」という生活に充足し、「仕官などの事は甚不調法千万」である⁷⁴⁾と考えたからである。友輔は、仕官を拒む理由として、「多方に仕へを求められ候人」があり、「屑」と酷評されたことをあげる。60年ほどまえのことであるが、猟官運動として酷評される。待ち焦がれたように即答することはできなかった。

もうひとつは、処遇に対する不満がある。友輔は、つぎのように述べる⁷⁵⁾。

此度御邦文武館に出候ては、定而雨森氏は御頭なり、小生は新番にて、先言て見れば諸役所の内改めとか下役人の如きものにては、甚難儀至極の事ならんと存候<中略>新番と申せば醫者の末座にも付かねばならぬこともあるべし。

大坂にいれば、「何れへ腰を折り候」こともないが、仕官すれば、組織の序列に組み込まれ、「新番」として「医者」の末座に列せられる。松江藩における藩医の地位の低さが窺われる。藩校では、雨森謙三郎は「御頭」であり、友輔は「下役人」にすぎない。謙三郎は、慶応2（1866）年2月、桃翠庵（世文）の後任として藩校修道館の儒学教授に任ぜられるが、すでにその内命をうけていたであろう。友輔は、どのような事情によるのか、謙三郎に反抗心をもち、その下風にたつことに不満をいだく。

謙三郎は、文政5（1822）年、松江藩士妹尾清左衛門の3男に生まれる。友輔より1歳年少である。天保2（1831）年、10歳のころに藩校にはいり、桃西河に師事し、天保5（1834）年には田村寧我の家塾学半舎にうつる。寧我は、松江藩における「古文辞学の大家」である⁷⁶⁾。謙三郎は、天保9（1838）年11月、藩命により、山根善八とともに大坂に旅立ち、12月に小竹に入門する。

謙三郎の遊学は、藩の重職の推薦によるものであり、松江藩のはじめての藩費遊学生である。謙三郎は、松江藩蔵屋敷のちかくの小竹塾に入門するが、小竹は寛政正学派の学統をうけた朱子学者である。謙三郎は、やがて小竹の紹介により、徂徠学を奉じる藤沢東咳の泊園

書院にうつり、「塾長」になり、「居二歳」、2年ほど東咳のもとでまなぶ⁷⁷⁾。謙三郎は、2年後には小竹のもとにもどるが、脚気にかかり、天保12(1841)年4月、帰藩の途につく。小竹は、「得_レ病。將_レ歸養_一」謙三郎に「送妹尾君恭序」と題する文をおくる⁷⁸⁾。大坂滞在中、ほとんどのあいだ東咳塾に在籍しただけでなく、塾長にあげられるほどに古文辞学に習熟していたことになる。謙三郎は藩費遊学生であったが、天保10(1839)年前後、修学については本人の自由意思にゆだねられていた。

謙三郎は、帰藩後、明教館で研鑽する。明教館教授は、徂徠派の原田新助である。謙三郎は、新助の口添えにより「儒學志厚」として藩に褒賞される⁷⁹⁾。翌天保13(1842)年には、松江藩執政の神谷源五郎の上府に随行する。謙三郎は、藩邸に起居し、「月々金二歩」の「修業料」を給付される。藩邸では9代藩主齊賢に「なりたけ經史」を講じたりする。同年8月には、林家塾の塾長である河田迪斎の私塾に入門する。迪斎は、文化3(1806)年、讃岐金蔵寺村に生まれ、文政3(1820)年、伊予小松藩者近藤篤山にまなぶ。文政8(1825)年、江戸におもむき、昌平坂学問所書生寮に入寮し、尾藤二洲に師事する⁸⁰⁾。八代洲河岸の林家塾の塾長であった佐藤一斎にみだされ、一斎が、文化元(1804)年に林家邸宅の西隣に新築した愛日楼に移籍する。迪斎は、天保4(1833)年には、一斎の養子にむかえられる。天保12(1841)年、一斎が昌平坂学問所儒者を命じられ、敷地内の役宅にうつると、迪斎は愛日楼を譲渡される。迪斎は、一斎にかわり林家塾の塾長になり、みずからも門生をうけいれる。その門生のひとり謙三郎である。謙三郎は、大学頭の林檉宇、迪斎の教えをうけるが、江戸遊学中、「佐藤一斎・安積良齋にも從遊せられた」⁸¹⁾ことはない。良齋は、良齋は林家塾からはなれ、文化11(1814)年に神田駿河台に私塾をひらき、天保14(1843)年には陸奥二本松藩校敬学館の教授に登用される。嘉永3(1850)年に幕府儒者に抜擢され、神田鈴木町に居をかまら

表 松江藩校教授

教授名	在任期間	備考
桃白鹿	宝暦8(1758). 6～享和元(1801). 8	寛保元(1741). 林家塾入門4代 <small>りゅうこう</small> 榴岡
桃西河	享和元(1801). 12～文化7(1810). 8	天明2(1782). 8林家塾入門5代風谷
桃黄園	文化7(1810). 12～文化14(1817). 2	林家塾入門の形跡なし
園山西山	文化14(1817). 4～文政4(1821). 4	安永5(1776). 江戸藩邸付儒者宇佐美瀧水
原田良助	文政4(1821). 7～文政11(1828). 6	徂徠学
原田新助	文政12(1829). 8～弘化4(1847). 12	徂徠学
桃翠庵	嘉永元(1848). 2～慶応2(1866). 2	天保3(1832). 4林家塾入門
雨森謙三郎	慶応2(1866). 2～明治2(1869). 5	天保13(1842). 8河田塾入門 河田迪斎
桃節山	明治2(1869). 5～明治4(1869). 7	安政元(1854). 4林家塾入門

が、安政大地震で焼けだされ、敷地内の役宅にうつる。儒者の小伝は、このころ江戸に遊学した人びとが師事した儒者として、佐藤一斎の名をあげる。

松江藩は、唐の李延寿が撰述した『南北史』を校勘出版するよう幕府に命じられ、謙三郎は、その校訂の「御用手伝」を命じられ、帰藩する。謙三郎は、林家塾には10ヶ月ほどしか在籍しなかった。その後、藩主の側近として重用される。幕末の動乱期に政治都市化した京都に御内用取次役として滞在し、越前藩主松平慶永、徳大寺実則の父公純きんいとに謁見する。謙三郎が大坂の友輔のもとに訪ねきたのは、京都滞在中である。謙三郎は、元治元（1864）年12月には、藩主安定から新知行100石を給与され、組外格に列せられただけでなく、雨森姓を下賜される。安定は、津山藩主松平斉孝の実子であるが、雨森は安定の生母の里方の姓である。松江藩では、組外の家格は家老、中老、番頭につぐ武家の家格である。

友輔の素行を問題視していた松江藩が友輔を登用するのは、どのような理由からであろうか。松江藩では、松平家初代の直正の時代以降、林家塾門、伊藤仁斎門、荻生徂徠門の儒者が登用され、幕府が朱子学を正学として取り入れたのちにも、藩学は統一されることはなく、諸学派の儒者が藩校の教授職をになう。藩主定安の時代になり、弘化期（1844～1848）のはじめ、「昇平校ニ倣ヒ朱子學ヲ脩ヘシ」という通達があり、「昇平校」モデルを移植するという方針がしめされる⁸²⁾。万延年間（1860～1861）にいたり、「學問ハ凡テ朱子ノ學派ニ取極ム」という通達がだされ、「素讀講釋共ニ朱註ヲ通用ス可キ」ことになる⁸³⁾。藩校教授は、徂徠派の原田新助から桃翠庵にかわっていた。翠庵は、桃家第3代の黄園の養子にむかえられ、天保3（1832）年に東游し、八代洲河岸の林家塾にはいり、佐藤一斎に師事する⁸⁴⁾。嘉永元（1848）年2月に教授に任ぜられる。文久2（1862）年2月、「四書素読」を基礎とする松江藩校の「学則表」が制定される⁸⁵⁾。「学則表」は藩内の私塾にも適用される。翌文久3（1863）年5月には、文武諸教場を藩校として集約するために松江城下殿町に文武館が新設されることになる。朱子学に統一された藩学をになう教授スタッフを補充する必要があった。

友輔は、謙三郎の推挙により「昇平校」モデルを移植する教授スタッフとして松江藩に登用される。「昇平校」は、幕府直轄の昌平坂学問所であるが、「昇平校」モデルは幕臣の稽古人のために考案された試業制度、試業、学問吟味をうけるまでの準備課程をもふくめたシステムとしてのモデルを意味する。謙三郎は、朱子学一尊の藩校をひきいる教授につくことが確約されている。友輔は、「御頭」になる謙三郎については、いくつか得心がいかない点があった。もともと徂徠学を奉じていた謙三郎はいつ朱子学を信奉するようになったであろうか。謙三郎は、全国の俊秀が参集する昌平坂学問所に入寮し、一斎、艮斎という当代随一の大儒の警咳に接したことはない。朱子学一尊の藩校をひきいる教授の資格があるであろうか。システムとしての「昇平校」モデルを理解できるであろうか。こうした疑念が友輔に不審心をいだかせたであろう。松江藩が、「昇平校」モデルの移植を決定する経緯については、別稿

で論ずる。

おわりに

内村友輔は、山陰の松江城下の町人の第4子に生まれる。養子の口がなければ、生涯、下男のような生活をつづけなければならない。学問とはほど遠い家業であったが、寺僧や塾師に才能を見いだされ、儒者として生計をたてるという着想を得たとおもわれる。友輔は、弘化期（1844～1848）に京撰にのぼり、大坂の篠崎小竹塾に入門する。小竹は、昌平坂学問所において寛政正学派の尾藤二洲と古賀精里に師事し、正学派朱子学の学統をうけた儒者であり、全国各地の俊秀をうけいれ、全国各地に再配分する朱子学の学修・研究センターである昌平坂学問所とつながりをもつ。友輔は、嘉永4（1851）年、小竹の推薦により学問所儒者の安積良斎に入門し、良斎の家塾生として昌平坂学問所書生寮に入寮する。友輔は、借財を返済しなければ退寮もできないという「貧苦」のなかで4年あまり書生寮にとどまる。その間、友輔は「經學」にはげみながら、寮生同士で輪読や会読にとりくみ、月に1、2回の佐藤一斎と安積良斎の「經書会」に参加し、原理主義的な正学ではなく、思想的に相対化された朱子学をまなぶ。友輔は、全国から参集した俊秀と交遊する。儒学を媒体とした寮友との関係は、主従の忠誠の関係ではなく、社会的、地理的な懸隔を超越したヨコの関係をうみだす。友輔の在寮中、ペリー艦隊の来航、日米和親条約の締結という幕府の外交政策の根幹をゆるがす事態が生じる。書生寮では、「攘夷論」がわきおこるが、友輔は「熱狂」の渦にまきこまれ、内政外交の現実に視野をひろげる。

友輔は、退寮後、安政4（1857）年に徂徠学無頼派の火種が燦然大坂に私塾をひらき、儒者として生計をたてる。大坂も幕末動乱の時代をむかえ、友輔の近辺には、動乱の気配がこくなり、書生寮在寮中から「攘夷論」をととなえていた旧友がおとづれ、尊王攘夷派の集会所になる。やがて諸藩士、とくに幕末の動乱期に雄藩として尊王攘夷運動を主導する萩藩の人びともたずねくるようになる。友輔は、江戸の昌平坂学問所において幕末の激動の序幕に立ち会った識者のひとりである。儒生として小竹塾、昌平坂学問所という正統な修学課程をたどり、三都のひとつの大坂において儒者として朱子学を講じる友輔は、松江藩がもつめる儒者にほかならない。

友輔は、幕府直轄の昌平坂学問所を頂点とする広範な朱子学ネットワークのなかにいた。友輔が藩校修道館の儒学教授職を約束された謙三郎に敵愾心をいだいたのは、謙三郎が「昇平校」モデルを移植する任務にあたるのがふさわしいか否か疑問をいだくからである。謙三郎は林家塾に在籍したことはあるが、朱子学ネットワークの最高峰にそびえる昌平坂学問所でまなんだことはない。もともと徂徠学を奉じていた謙三郎がどのような経緯で朱子学に転じたのか、システムとしての「昇平校」モデルを理解しているか否か、疑心をいだいてい

たであろう。

本稿では、儒者の修学歴や人脈について執拗に書きつらねた。それは、儒者が儒学をとおり、いかに広範なネットワークを形成しているか描きたかったからである。

旧師谷口幸男先生を偲びつつ

【註】

- 1) 岡千仞、『在臆話記』第3集卷4, 森銚三他編, 『隨筆百花苑』第1巻, 中央公論社, 昭和55年, 365頁。
- 2) 森銚三, 『松本奎堂』, 中央公論社, 昭和52年, 210頁。
- 3) 「内村鱸香」, 谷口廻瀾, 『島根儒林傳』, 飯塚書房, 昭和52年覆刻(昭和15年初版), 260頁。
- 4) 青山侑市, 『松江掃苔録』, 松江市教育委員会, 2012年, 7頁。
- 5) 桑原洋次郎編著, 『勤王儒者内村鱸香先生』, 鱸香先生顕彰会, 昭和14年, 口絵。
- 6) 「内村鱸香」, 『島根儒林傳』, 261頁。
- 7) 「蚕社遭厄小記」, 高野長運, 『高野長英伝』, 高野長英全集刊行会, 昭和14年, 457頁。括弧内割注。斜線部改行。
- 8) 桃裕行, 「松江藩の洋学と洋医学」中, 『日本医史学会』第1304号, 昭和17年6月, 247頁。
- 9) 福井淳哉, 「貫名菘翁の書道観——形成過程に関する一考察」, 『書道学論集』第1巻, 2003年3月, 71頁。
- 10) 「幕末大坂文人社会の動向」, 小堀一正, 『近世大坂と知識人社会』, 清文堂, 1996年, 149頁。
- 11) 「朱学維持ノ儀林家へ達」, 文部省編刊, 『日本教育史資料』7, 卷19, 明治25年, 1～2頁。
- 12) 尾藤二洲書簡, 宇田川楊軒宛, 9月18日付, 白木豊, 『尾藤二洲伝』, 尾藤二洲伝頒布会, 昭和54年, 86頁。
- 13) 衣笠安喜, 『近世儒学思想史の研究』, 法政大学出版局, 2005年, 19頁。
- 14) 多治比郁夫校注, 「篠崎小竹門人帳」, 宗政五十緒・多治比郁夫編, 『名家門人録集』, 1981年, 192頁。
- 15) 島根県学務部島根県史編纂掛編, 『島根県史』第9篇 藩政時代下, 島根県, 昭和5年, 585頁, 国立国会図書館デジタルコレクション。
- 16) 大岡尚賢訂正, 『増脩改正攝州大阪地圖』, 赤松九兵衛, 文化3(1806)年, 国立国会図書館デジタルコレクション。図の右が南である。図の左側を上下にながれる土佐堀は, 西横堀にであう。土佐堀から右へ3番目の尼崎橋の筋をのほれば, 尼崎二丁目, 一丁目とつづく。二丁目には, 小竹の広大な居宅と塾, 一丁目には懷徳堂があった。尼崎橋の筋をくだれば, 斎藤町, 白子裏町とつづく。斎藤町には, 友輔が下宿した出雲屋儀右衛門の出雲荷受問屋があり, 友輔が私塾をひらいたのも斎藤町である。白子裏町には, 松江藩蔵屋敷がある。白子裏町の筋をくだると, 「長門萩」, 萩藩蔵屋敷があり, 図にはないが, その下方に飢肥藩蔵屋敷がある。図の左下の堂島川沿いに大村蔵屋敷がある。松本奎堂らがひらいた双松岡学舎はその近辺にある。広瀬淡窓の末弟である旭莊は, 天保9(1838)年に西横堀船町橋東詰に塾をひらく。尼崎橋の左側に船町橋があり, 上側に旭莊塾がある。尼崎一丁目の左側, 土佐堀沿いに緒方洪庵が塾をひらいた過書町がある。中之島界隈には, 諸藩の蔵屋敷がならび, 私塾が点在する。
- 17) 島内登志衛編, 『谷干城遺稿』上, 靖献社, 明治45年, 32頁。
- 18) 古賀勝次郎, 「安井息軒の生涯——安井息軒研究」(2), 『早稲田社会科学総合研究』8(2), 2007年12月, 4頁。
- 19) 「徂徠先生答問書」下, 島田虔次編, 『荻生徂徠全集』第1巻, みすず書房, 1973年, 468頁。
- 20) 『勤王儒者内村鱸香先生』, 121頁。
- 21) 木崎愛吉, 『篠崎小竹』, 玉樹香文房, 大正13年, 70頁。
- 22) 内村鱸香書簡, 山口叔多・内村義八郎宛, 嘉永3(1850)年6月3日付, 『勤王儒者内村鱸香先生』, 5～6頁。
- 23) 『島根儒林傳』, 264頁。
- 24) 嘉永4(1851)年4月15日付書簡, 同上書, 264～265頁。
- 25) 安積良斎顕彰会編刊, 『安積良斎門人帳』, 2007年, 222頁。
- 26) 「寄宿」, 『日本教育史資料』7, 卷19, 191頁。

- 27) 旧事諮問会編, 進士慶幹校注, 『旧事諮問録』下, 岩波書店, 1986年, 150頁。
- 28) 関山邦宏・橋本昭彦編, 『書生寮姓名簿』『登門録』翻刻ならびに索引, 1999年, 9～10頁。
- 29) 『島根儒林伝』, 272頁。
- 30) 同上書, 265頁。
- 31) 内村友輔書簡, 山口叔多宛, 嘉永5(1852)年4月20日付, 『勤王儒者内村鱸香先生』, 21頁。
- 32) 内村友輔書簡, 山口叔多宛, 嘉永5年4月20日付, 同上書, 16～22頁。
- 33) 内村友輔書簡, 山口叔多宛, 嘉永5年12月27日付, 同上書, 28頁。
- 34) 内村友輔書簡, 山口叔多・内村茂八宛, 嘉永5年5月4日付, 同上書, 24頁。
- 35) 内村友輔書簡, 山口叔多宛, 嘉永5年4月20日付, 同上書, 21頁。
- 36) 久布白兼武, 『原応侯』, 原忠一, 大正15年, 82～83頁。
- 37) 吉田公平, 『日本における陽明学』, べりかん社, 1999年, 144頁。
- 38) 「佐藤一斎」, 中村安宏・村山吉廣, 『佐藤一斎・安積良斎』, 明德出版社, 平成20年, 86頁。
- 39) 揖斐高編訳, 『江戸漢詩選』下, 岩波文庫, 2021年, 145～147頁。
- 40) 金谷治訳注, 『論語』李氏第16, 岩波書店, 1963年, 230頁。
- 41) 安積信, 「聖賢因時立教論」, 『良斎文略』中, 見山樓藏, 天保辛卯南至前一日培齋序, 郡山市立図書館デジタルアーカイブ。
- 42) 「旧幕府学問所構内総絵図」天保15年, 文部省編, 『日本教育史資料集』附録1, 富山房, 明治37年, 国立国会図書館デジタルコレクション。左に南・北の書生寮があり, 友輔は南寮に起居していた。その上に南・中・北の3棟の稽古人部屋があり, 寄宿稽古人・通稽古人をうけいれる。その右に, 大成殿があり, 右上端に尾藤二洲の役宅がある。左下端に佐藤一斎の役宅があり, その下の道路を隔て, 左右に神田川が流れる。その下に駿河台がひろがる。
- 43) 『在臆話記』第三集第一, 『隨筆百花苑』第一巻, 昭和55年, 40頁。
- 44) 『松本奎堂』, 33頁。
- 45) 眞壁仁, 『徳川後期の学問と政治』, 名古屋大学出版会, 2007年, 127頁。
- 46) 『在臆話記』第三集第一, 『隨筆百花苑』第一巻, 40頁。
- 47) 箕作阮甫が翻刻したオランダ文法書。前編は『和蘭文典前編』(Grammatica, of Neder-duitsche Spraak-kunst, uitgegeven door de Maatschappij)と題し, 天保13(1842)年刊。後編は『和蘭文典後編成句論』(Syntaxis, of woordvoeging der Nederduitsche Taal, uitgegeven door de Maatschappij)と題し, 嘉永元(1848)年刊。原書は文政末年から天保初年にかけて坪井信道や伊東玄朴の塾で使用されるが, 阮甫によって翻刻されてからは, オランダ語学習上必須のテキストとして使用されることになる。
- 48) 『原応侯』, 原忠一, 大正15年, 83～86頁。原応侯, すなわち鹿島藩の原忠順は安政4(1857)年に入寮する。
- 49) 頼山陽, 頼成一・頼惟勤訳, 『大日本史』上, 岩波書店, 2005年(1976年改訂第1冊), 105頁。
- 50) 尾藤正英, 「解説」, 頼山陽, 頼成一・頼惟勤訳, 『大日本史』上, 岩波書店, 2005年(1976年改訂第1冊), 11頁。
- 51) 『下田日記』, 川路聖謨, 藤井貞文・川田貞夫校注, 『長崎日記・下田日記』, 平凡社, 1992年(1968年初版第一冊), 117頁。
- 52) 『勤王儒者内村鱸香先生』, 35頁。
- 53) 「内村友輔筆記ノ一斑」, 「旧松江藩学校」, 『日本教育史資料』2, 465頁。
- 54) 『在臆話記』第3集巻8, 『隨筆百花苑』第2巻, 36頁。
- 55) 『在臆話記』第3集第10, 『隨筆百花苑』第1巻, 65頁。
- 56) 『勤王儒者内村鱸香先生』, 104頁。
- 57) 尾藤正英, 『日本文化の歴史』, 岩波書店, 2000年, 207頁。
- 58) 鎌田道隆, 「幕末京都の政治都市化」, 『京都市歴史資料館紀要』10, 1992年。
- 59) 『在臆話記』第3集巻4, 『隨筆百花苑』第1巻, 365頁。
- 60) 『松本奎堂』, 178頁。
- 61) 『勤王儒者内村鱸香先生』, 30頁。
- 62) 『松本奎堂』, 210頁。
- 63) 同上書, 219頁。
- 64) 「大村純熙」, 足立栗園, 『近世日本国防論』下巻, 三教書院, 昭和15年, 443頁。

- 67) 『松本奎堂』, 178頁。
- 68) 内村友輔書簡, 山口叔多宛, 文久元 (1861) 年 7 月 1 日付, 『勤王儒者内村鱸香先生』, 45~46頁。
- 69) 内村友輔書簡, 山口叔多宛, 文久 2 (1862) 年 4 月 8 日付, 同上書, 32頁。
- 70) 「久坂玄機」, 「忠節事蹟」六, 「一般郷土史料」, 山口県文書館所蔵。
- 71) 「親論書」, 末松謙澄, 『修訂防長回天史』第 3 編上 (『防長回天史』3), 末松春彦, 明治44年 (平成 3 年復刻, マツノ書店), 316頁。
- 72) 内村友輔書簡, 山口叔多宛, 元治元年 3 月 28 日付, 『島根儒林伝』, 278~280頁。
- 73) 「内村鱸香とその時代」, 乾隆明, 『松江歴史余話』, 今井出版, 2011年, 73頁。
- 74) 内村友輔書簡, 季瓜園主人 (山口叔多) 宛, 元治元年 3 月 10 日付, 『勤王儒者内村鱸香先生』, 91~93頁。
- 75) 内村友輔書簡, 山口叔多宛, 元治元年 3 月 28 日付, 『島根儒林伝』, 93~96頁。
- 76) 「雨森精翁」, 同上書, 197頁。
- 77) 「贈妹尾君恭序」, 藤沢東垓, 『東垓先生文集』系, 泊園書院, 明治17年, 17~18丁。
- 78) 篠崎小竹, 『小竹先生手稿』第 7 卷, 写本, 国立国会図書館デジタルコレクション。
- 79) 『島根儒林伝』, 201頁。
- 80) 「先考恵迪府君行状」, 「儒員小伝」, 『日本教育史資料』7, 592~594頁。
- 81) 『島根儒林伝』, 201頁。
- 82) 「舊松江藩」, 『日本教育史資料』4, 明治24年, 258頁。
- 83) 「學事上ノ諸制度」, 「旧松江藩学校」, 『日本教育史資料』2, 明治23年, 463頁。
- 84) 「松江藩学事曆」, 『島根儒林伝』, 7頁。
- 85) 「教則」, 「旧松江藩学校」, 『日本教育史資料』2, 467頁。

Zusammenfassung

Über Yūsuke Uchimura im Netzwerk des Neokonfuzianismus

MORIKAWA Jun

Yūsuke Uchimura ist als vierter Sohn eines Bürgers (chōnin) in der Burgstadt Matsue geboren. In seiner Kindheit wählt er ein Konfuzianer als Broterwerb. In Ōsaka, eine der drei Großstädte (santo), lernt er beim berühmten Gelehrter Shōchiku Shinozaki. Auf Empfehlung von Shōchiku bezieht er im Jahre 1851 die Shōheizaka Gakumonsho in Edo, die Lehrstätte von der Tokugawa-Shōgnat. Im Jahre 1858 eröffnet er eine Privatschule in Ōsaka, und liest Neokonfuzianismus. Nach sechs Jahren wird er als neokonfuzianischer Gelehrter vom Territorialfürst (daimyō) in Matsue berufen. In dieser Studie möchte ich untersuchen, unter welchen Umständen er von dem Territorialfürst angestellt wurde.